

日本語方言アスペクトの研究

著者	津田 智史
号	24
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博 第432 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59395

つ だ さと し 津 田 智 史

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 432 号
学位授与年月日	平成25年 3 月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
最 終 学 歴	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 言語科学専攻
学 位 論 文 題 目	日本語方言アスペクトの研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 小 林 隆 教 授 齋 藤 倫 明 教 授 才 田 い ず み 准教授 大 木 一 夫 准教授 甲 田 直 美

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本語研究の中のアスペクトをどのように捉えるべきか検討し、また日本語全体としてアスペクトをどのように把握できるかを考察することを目指すものである。日本語全体としてアスペクトについてみていくため、各地方言のみならず、標準語についても言及した。

第 1 章「アスペクト研究の在り方を問う」

第 1 章では、現在の日本語アスペクト研究における問題点を挙げ、どのようにその問題点を改善・克服していくべきかについて述べた。これは、本研究通しての目的・問題意識でもある。また、本研究が持つ意義について述べた。

現在の日本語アスペクト研究の問題点としては以下のようなものがある。

(1) アスペクトの形式に関わる問題

時間的局面を表す形式は多様にあるが、標準語のテアル形など、対象とされないものも多い。また、体系をみても、方言においては標準語よりもさらにバリエーションが多いことが予測される。

(2) アスペクトの用語に関わる問題

いわゆる進行といったときの、表す局面は話者と調査者で共有されているか。また、限界性といったときに、それは内的に持つものか、外的に与えられたものか。用語の持つ意味が統一されていない場合もある。

(3) アスペクトの枠組みに関わる問題

体系立てを行う際、一つの枠に複数形式が振り分けられるのはなぜか。正確にアスペクトの意味の対立を反映しているものかの判断ができない。また、それを意味の拡張と捉えることは適当か。

これらの問題点を改善・克服するために、次のような作業が必要になることを述べた。

(1) バリエーションの把握

特に方言において、形式のバリエーションと局面による形式の多寡を把握する。

(2) 調査法の統一化

より詳細に局面を指定し、できるだけ具体的な場面を提示することで、用語中心ではなく、局面を中心として形式の差異の把握の手助けとする。

(3) 個別意味の特定

各地でみられる多様な形式の個別意味を把握することで、形式により表し分けられる意味を探る。

このような作業をもとに、日本語アスペクトについて考えていくことが必要になることを述べた。また、このような問題点の把握と、それを改善・克服する作業はこれまで、意味や枠組みありきで進められてきた日本語アスペクト研究に一石を投じるものである。その点で、本研究の果たす意義は大きいものであることを述べた。

第2章「方言アスペクトの研究をめぐって—工藤的段階—」

第2章では、第1章を受け、方言アスペクト研究の先行研究について、「工藤以前」とそれ以降に分け、どのような研究手法が主流であったかを示し、それらを把握することで、今後の研究の向かうべき方向性を示した。

「工藤以前」の研究では、継続態、已然態と分けられもするが、概ね各地方言の実態に即して記述されることが多く、その表す意味の違いにも、アスペクト的な意味合いだけでなく、その他の面から区別がされているものがある。しかし、奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」（『国語国文8』宮城教育大）から工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』（ひつじ書房）などの一連の研究により、ル形とテイル形のアスペクトの対立が広く認められるようになった。その中で、工藤は西洋言語学の理論を多数紹介したこと、また限界性による動詞分類や、テイル形の表すアスペクトの派生的意味の把握、テイル形のテキスト内でのふるまいなど、明らかになったことは多いが、反対に問題点も多く明らかになった。そこから実態に立ち返るのではなく、積極的に西洋言語学の理論を次々に適用していったことで、かなり体系的に無理のあるものになっている。

そのような現状を受け、今後は、批判的に現行のアスペクトの体系をみることの必要性や、アスペクトの意味や枠組み自体を再検討する時期にあることを述べた。また、「工藤以前」の研究の方が実態に即し、問題も少なく記述・解釈を行っていると捉えられることから、アスペクトを「形式から意味」の方向で捉えることの重要性を述べた。

第3章「標準語テイル形の意味・再検討」

第3章では、第1章（3）で述べた問題点をもとに、テイル形とル形は本当に対立を示すものか、ま

たなぜテイル形は動作継続と結果継続のまったく時間局面の異なる意味を表しうるのか考察するため、従来、継続相を表すとされる標準語テイル形の意味を再検討した。

1「ル形との対比からみたテイル形の基本的」

第3章1では、まずテイル形がル形とアスペクト的に対立を示すものではなく、ル形を内包する形式であることを先行研究などから確認し、ル形の表す意味を再確認した。そこでは、動詞の多義性により、同じ動詞がル形で用いられても限界性に違いがみられることが窺えた。ただし、表していることは、動詞の表す事態が生起することのみであることを示した。そこから、ル形とテイル形の表す意味を比較し、テイル形の基本的意味はアスペクト的な継続相ではなく、以下のように示すことができた。

テイル形：動詞の表す事態が生起し、その事態が基準時において何かしらの形で存在することを表す形式。

この基本的意味をもとにして、アスペクト的な観点で局面を判断すると、動作継続や結果継続のどちらも担う継続相という捉え方も可能になることを述べた。

2「テイル形の派生的意味」

第3章1のテイル形の意味を用いてパーフェクト、痕跡、反復習慣、単なる状態などのアスペクトの派生的意味についても同様に説明することができる点で、形式自体の基本的意味と捉えることができることを示した。

ここで確認すべきは、この基本的意味から、どのように継続相（動作継続、結果継続）や派生的な意味を表しうるかということである。基本的にテイル形の表すものは前述のような意味であり、それが継続相やアスペクトの派生的意味を表すには、文脈や周辺形式を必要とするのである。例えば、「お母さんが、窓を開けている。」は、「開ける」は主体動作客体変化動詞であり内的限界を持つ動詞であるので動作継続に捉えられるが、「誰かが、窓を開けている。」にすると結果継続にとれる。「毎日、お母さんが、窓を開けている。」ならば反復習慣にとれる。主体に意志性がないために動作の継続を表しにくくなったり、副詞によって意味が加えられたり、これらはテイル形の意味ではなく、前者は語彙的制約、後者は周辺語句との関わりによる意味である。このように、標準語のテイル形は上記のような基本的な意味しか持たないが、文脈や周辺形式との関係などによりアスペクトの意味を表わすものであることを示した。

第4章「調査法と理論的枠組みの再検討」

第4章では、第1章(2)の問題点から、アスペクトの規定がどのようになされているかをみていくことで、特に西日本諸方言のアスペクト研究において、個々の形式の意味からアスペクトの規定が行われていないことを述べた。それに伴い、従来の調査の調査文を比較することで、改めて、統一的で洗練された調査票が必要であることを述べた。アスペクトの規定や調査法については以下のような問題点があることを論じた。

調査法に関して

- i) 調査者と話者との間で想定場面に異なりがある場合がある。

ii) その際、調査員の示す補助的誘導に形式が左右される恐れがある。

アスペクトの規定に関して

iii) 進行というアスペクト的意味は場面的なものか、話者の判断的なものか。

iv) トル形の競合は本当に起こっているか。

これらを改善するために、より精査された調査票を作成し、細かい状況までも話者との間で共通にイメージを持つことが必要であることを述べた。調査票の段階で統一がとれない場合でも、調査者が独自に誘導をかけるのではなく、調査文の状況を事前に理解し、適切な場面を提示することが重要になることを述べた。さらに、使用のニュアンスの違い、話者の内省、複数形式使用の場合の形式間の差異などに、真摯に耳を傾ける必要性を述べた。

また、第1章(3)の問題点から、山口県方言の談話資料をみていくことで、形式の個別意味の必要性をあらためて述べた。談話資料から、場面的に進行と捉えられる局面で使用されるヨル形、トル形のふるまいを確認し、そこから、進行の場面でみられる両形式の意味として、ヨル形とトル形の表す意味について以下のように指摘した。

ヨル形：「基準時に事態がアクチュアルに起こっていることを示す形式」

トル形：「動詞の表す事態が基準時まで継続していることを示す形式」

これは、工藤以前の先行研究の意味付けとほぼ重なるものであった。そして、このヨル形とトル形の差異はアスペクトという文法カテゴリで区別されるものではなく、どのように事態を捉えているか、その捉え方で違いをみせるものであることが窺えた。また、トル形と第3章で示したテイル形の意味の類似性にも触れた。このことから、既存の理論的枠組みであるアスペクト的意味の進行と結果の分類ではヨル形とトル形の意味の差異を示せていないことを述べた。

第5章「各地方言のバリエーションとその意味」

第5章では、第1章の問題点(1)(3)を受けて、各地方言のアスペクト形式のバリエーションを把握し、その意味を検討するための調査を行った。なおここでは、その形式が広く使用されているかを判断するため、またアスペクト形式として当該地域でより一般的に認められる形式か判断するため、分布調査を行った。各地方言の報告に関しては、それぞれ必要な調査結果を地図で示しながら、形式のバリエーションと意味を検討した。

1「東北地方のアスペクト形式とその意味」

第5章1では、青森県下の調査をもとに、当該地域におけるアスペクト形式の把握とその意味についての検討を行った。また、東北地方のアスペクトに関する先行研究と比べてみても、本調査結果とさほど違いがみられず、大いに重なるところがみられたことから、東北地方のアスペクト形式全体にも言及した。そこから、東北諸方言では、出来事(事態)と現在の関係から形式が選択されることを述べた。特に青森県では、アスペクト形式の使い分けは以下のような意味で行われることを述べた。

タッタ形：すでに起こっている出来事が現在まで続いていることを示す形式。

テダ形：すでに起こっている出来事が現在も続いていることを含意する形式。

テラ形：出来事の存在のみを示し、現在との関係を明示しない形式。

テル形：現在の恒常的な状態を示す形式。

これらは、似た形式ではあるが、表す意味は異なるものである。また、アスペクト的意味による形式の使い分けというよりも、発話時と出来事の関わりという関係の表し分けがみえてきた。タッタ形がテンス現在の継続は表わさず、テンス過去の継続を表しうることもその証明となる。さらに、テラ形とテダ形が単なる音声バリエーションではなく、上のような意味で示されるように、事態の存在のみを示すか、現在まで続いていることを示すかの違いを表すものである。このように、東北地方におけるアスペクト表現は出来事（事態）と現在との関係という面から位置づけられ形式が選択される。また、他の形式との張り合いからかテル形は標準語ほどの意味の広さはみせず、青森県方言においては恒常的意味を示す場合に積極的に使用されていることがわかった。

補説「南東北地方のテンス形式―「-カッタ」―

補説として、南東北地方の宮城県・山形県を結ぶ陸羽東線沿線におけるグロットグラム調査の結果からテンス形式「-カッタ」を取り出し、考察を行った。そこから、最上地方では「-カッタ」という形式が現在と切り離された過去を示す形式としてタッタ形に置き換わっていく様子が窺えた。これはテンス形式として示されるが、第5章1でも示したように、発話者が当事者として出来事を自分（の把握している現在）との関わりの中で捉えているという点に関しては同様であるといえる。ここから、東北地方におけるアスペクト形式は、出来事（事態）と現在との関係をどのように捉えて表すかという点において細分化されていることを述べた。

2「東西方言境界域のアスペクト形式とその意味」

第5章2では、東西方言の境界域である長野県下での方言調査の結果より、存在動詞の境界線に伴うアスペクト表現の東西境界は、あくまでも存在動詞をもとにした形の境界線であって、テル形とトル形など「動詞連用形+テ+存在動詞」としてまとめられる形式間では意味・用法面での明確な差異を見出すことは難しいことを述べた。また、「動詞連用形+テ+存在動詞」という点でテイタ形もほぼ同様の意味を持つと考えられるが、「以前から続いている」という存在動詞「いた」に還元できる意味により、多少使用範囲が異なっていることが窺えた。

また、存在動詞「おる」分布域にみられるヨル形や、存在動詞「いた」を内包するイタ形は、「いる」分布域にはみられないものであった。そこから、「動詞連用形+テ+存在動詞」形式の類似性を考えると、ヨル形やイタ形の存在が非常に特異なものであることが窺えた。それを踏まえ、以下のように各形式の意味を示した。

テル形・トル形：動詞の表す事態が起こり、その事態の何らかの（事態に関わる）状態が基準時まで続いていることを表す形式。

テイタ形：動詞の表す事態が起こり、その事態が基準時まで状態的に継続していることを表す形式。

ヨル形：動詞の表す事態が基準時において動的（アクチュアル）に起こっていることを表す形式。

イタ形：動詞の表す事態が以前から継続して基準時に至ることを表す形式。

ヨル形はアクチュアルな事態を、イタ形は事態が以前から切れ目なく続いていることを示すものであり、この点で意味も異なることがわかった。特にヨル形は西日本諸方言で広く使用されているが、それらは、形態的にも意味・用法的にも「動詞連用形+テ+存在動詞」が取り立てないものを表すことができる形式と位置づけられると推測した。また、イタ形、テイタ形は、存在動詞の特殊性から使用地域がかなり限られており、これらが「いる・おる」形のアスペクト形式と異なる意味を表すことは、このような形式が存在動詞としての意味を含むものであることを示すものと捉えられる。

さらに、西日本諸方言でのヨル形の使用の頻度から、アスペクト的意味の運用のうえではトル形がヨル形から少なからず影響を受けていることは考えられることを示した。ヨル形というアクチュアルな動きを明示する形式が行われるため、併用されるトル形がより状態的なもの、結果的なものに寄った意味合いに使用されがちであるということである。西日本諸方言で痕跡などでの使用の割合が増えるのは、アスペクト的な意味を考えたとき、トル形の持つ基本的意味が、ヨル形の存在により制限され、結果の意味合いへと派生の方向が限られるためであると予測した。しかし、テル形とトル形が基本的に表す意味範囲に大きな差異はないことを述べ、これらが表す局面は標準語テイル形と類似するものであることにも触れた。

3「徳島県方言のアスペクト形式とその意味」

第5章3では、徳島県におけるアスペクト表現の調査結果から、当該方言におけるアスペクト形式のバリエーションであるヨル形とトル形の表す意味について考察した。なお、その意味考察段階で、ヨル形、トル形が同様のふるまいをみせる場面があるが、それらは具体的には事態の把握のしかたに異なりがあることが窺えた。そこから、アスペクトの枠組みに対する批判も行った。

まず、動詞の動作（変化）の過程における表現の分布について徳島県下のアスペクト調査結果をみていくことにより、トル形の意味拡張を支持するだけの結果を見出すことはできないことを述べた。また、そこからいわゆる進行の場面において、ヨル形とトル形が同時に表れるのは、動詞の多義的な性格が関わる可能性を述べ、「進行」という用語の規定に疑問を呈し、ヨル形・トル形の表す意味をさらに深める必要性を述べた。その結果、その他場面の形式の使用状況などから、次のような基本的意味が見出された。

ヨル形：アクチュアルに起こっている事態を、（主観的に）知覚していることを表す形式

トル形：動作や変化が起こり、その状態が継続していることを（客観的に）表す形式

分布状況からヨル形・トル形の意味の違いがみえたことで、アスペクト体系の枠組みを構成するアスペクトの意味の進行・結果では両形式を区別することはできず、事態の把握の仕方により表し分けていることを示した。そのうえで、これらの基本的意味により、徳島県では、いわゆる進行・結果といった場面で両形式が運用されていることを示した。さらに、上に示したトル形の意味は、第3章で示したテイル形の「動詞の表す事態が生起し、その事態が基準時において何かしらの形で存在する」ことを表すという基本的意味に近いものであることを述べた。また、当該地域においては、標準語をはじめ東日本諸方言にはない、アクチュアルに事態を捉え表現するヨル形を持つ。この点で、どのような場面を言い表す形式が発達しているか、地域差が窺えることを述べた。

4「南九州地方のアスペクト形式―カタとゴッ―」

第5章4では、南九州地方で行ったアスペクト調査の結果から、当該地域で確認できる形式の内、他地域でアスペクト形式として運用されていない当該地域の特徴的な形式であるカタとゴッについて意味用法を確認し、その出自を推定した。

カタは、本来「アユンカタ（歩き回ることの意）」のように動詞に下接することで動作を「すること」として名詞的に示していたが、徐々にそこに内包する動作性・過程性に焦点があたるようになり、動作の同時並行を表す接続助詞としての表現を挟み、文末で進行過程の動作をも表すようになったと推定した。また、先行研究からのカタの広がりを見ると、用法の拡大という点では比較的新しい変化であることが窺えた。

ゴッは、元々様態を表す形式の「ごと ある（ようだの意）」から変化し、まず将然で使用されるようになり、時間的隣接場面である実際に「している」場面をも想定・含意して進行過程でも使用が可能になったと推定した。また、薩摩・大隅両半島の先端で固まって使用が確認されることから、かなり古い段階で文法化を起こしていたことが窺えた。

また、ここではヨル形、トル形の意味を検討するまでには至らなかったが、カタ、ゴッの意味については、次のように示した。

カタ：基準時において、事態の最中にあることを示す形式。

ゴッ：基準時において、確実性が高い事態が起こっていることを示す形式。

ここからもわかるように、カタ、ゴッともに基準時に動作が進行していることを表していることが窺えた。元々異なる意味を担う形式であったものが、アスペクト形式として時間的局面的切り出しを行う形式として使用されるようになったものである。アスペクト的に進行で使用されるようになったこの2形式は、よりアスペクト的の意味の中で運用されるように意味拡張している可能性を述べた。また、ここで示した調査の分布図からヨル形、トル形も当該方言では進行の場面を表す形式として認められることから、南九州地方では進行という場面において、どのように事態を捉えているか、事態の把握の仕方を使い分けられることが窺えた。このうち、ゴッのようにムード的意味合いを含むもの、カタのように事態の中にいることを明示するものなど、やはりアスペクトとして区分できない差異が確認できた。

第6章「ヨル形の意味検討」

第6章では、西日本諸方言にみられるヨル形に焦点を当て、その形式が使用される待遇表現やムード形式において、なぜヨル形が使用されるのか、またなぜ待遇表現やムード形式のような意味を表すことができるのかについて考察した。

第6章において、存在表現としての「おる」が、必ずしも下向きの待遇のみを表しているわけではないことは述べた。また、待遇の意味は2次的なものであり、卑語としての用法が基本でないことが窺えた。各地方言のムードとしてのヨル形も、表しているのは事態が存在することであり、ムードもヨルが持つ本質的な意味ではなかった。また、先行研究より、存在動詞「おる」の意味を「(主体的に)存在を描写する」もののように求め、その意味から、待遇の意味もムードの意味も解釈可能であることを示した。

さらに、アスペクト的意味である進行（不完成相）も前述の存在動詞「おる」の意味から十分に見出せることを述べた。つまり、アスペクト的な意味が基本的な意味ではないということである。事態を主

体的に描写することは、事態自体の存在をそこに認めることであり、さらに時間的局面を指定することにより、動作（事態）の進行を表すことが可能となる。ヨル形が内包する存在動詞「おる」の意味により説明が可能となるのである。そして、ヨル形の基本的意味を次のように規定した。

ヨル形：「動詞の表す事態がそこにあることを主体的に描写する」

そこから、待遇表現やムード形式、アスペクト表現でヨル形が使用されたとき、ヨル形の表す存在に注目して（その存在を直接的に）述べるか、主体的に述べる際の感情に注目するか、あるいは時間局面に位置付けるかによって捉えられる意味が異なってくることを述べた。先行研究には、明らかにアスペクトの意味と捉えられない用法もみられたが、概ねそれも上のヨル形の意味から説明が可能であった。この点からも、ここで示すヨル形の表す意味の正当性が窺えた。

このように、先行研究の各氏が述べる卑語的な意味、ムード的な意味、アスペクト的な意味は、それぞれ待遇として、モダリティとして、アスペクトとして捉えようとした場合にみられる意味であることがわかった。ヨル形がそれらの意味で解釈できるのは、ヨル形自身の持つ意味によるものであるといえる。ここでは、ヨル形がアスペクト専用形式ではないことを示した。

第7章「アスペクトをどう捉えるか」

第7章では、日本語学の中で使用されてきた「アスペクト」の用語の規定について確認し、日本語のアスペクト研究の中でどのように扱われているかを確認した。すると、それが概念自体や対立そのものを指すなど、さまざまな意味で使用されていることがわかった。また、海外のアスペクト研究で示される「アスペクト」の規定をみていくことで、アスペクト研究を進める際には広義のアスペクト（アスペクチュアリティ）として考えていくことが妥当であることを述べた。これはつまり、テイル形をアスペクト形式の代表として体系立てることは必要ではないということである。さらに、動詞の語彙的なアスペクト性による動詞分類についても問題があることを指摘し、動詞分類を行う際には、動詞の多義性を考慮に入れたアスペクト性の把握が必要であることも述べた。

また、テイル形が広義のアスペクトを表す形式のひとつであることを指摘し、日本語でアスペクトを考える際には、文法カテゴリという考えを適用してよいが、そこに含まれる形式たちは対立的ではなく、あくまでも時間的局面を切り出せるという共通点を持つ集合体として認識すべきであることを述べた。

さらに、そこから各地方言のアスペクト形式のバリエーションをどのように捉えるべきかを示し、そこには、事態をどのように捉えるかによって地域差があることを示した。東北地方では事態と現在の関係性によって表し分けられ、西日本ではいわゆる進行の場面をどのように捉えられるかによって表し分けられる。そして、標準語及び東日本では事態が起こり、そこにあることを表すだけで、周辺形式との共起によって細かい部分を表し分けるといった傾向がみえてきた。

第8章「日本語アスペクト研究の諸問題」

第8章では、各章における結果を振り返りながら、あらためて本研究の意義を述べ、また本研究で解決まで至らなかった点、今後の課題などを述べた。

本研究を通して、アスペクトの意味を表すものとしてル形とテイル形、ル形とヨル形、トル形など、2項もしくは3項で対立を示すものではないということがみえてきた。このことから、従来の枠組みありきの研究では、現状の日本語諸方言アスペクトの様相を描き出すことができていないことが窺えた。

その点からも、今後はより実態に即した調査が必要になる。また、各地方言の細かな形式の意味をみていくと、事態をどのように捉えて表し分けるかといった点で、地域差がみられた。このような差異は、これまで報告されなかったものである。さらに、日本語の文法論で述べられる文法カテゴリとしてのアスペクトは、いわゆるアスペクトの意味で対立を示すものではなく、時間的局面を切り出した形式の集合体であり、広義のアスペクト（アスペクチュアリティ）として捉えるべきものである。そのため、文法カテゴリとしてのアスペクトを認めたとしても、その中に属する形式はそれぞれがアスペクト的な意味対立を示すものではなく、それぞれが別々にアスペクトの意味を表しえる形式だと捉える必要がある。このような視点は、おそらく他の文法カテゴリに当てはまることも予想される。その点で、本研究の担う意義は大きいと考える。

次に、本研究全体を通してみられた課題を挙げる。

- a) 日本語諸方言におけるアスペクト形式の把握と意味検討
- b) 調査法の統一と調査票の精練
- c) 日本語諸方言における記述調査の徹底

a) に関して、本研究でもいくつかの地域を扱ったが、これらの地域だけの結果では日本語方言全体として捉えたことにはならない。ただし、ある程度地域的に固まって事態の表し分けの傾向がみられることが窺えた。本研究で扱えなかった地域についてはさらに調査をし、使用されるアスペクト形式のバリエーションを把握する必要がある。

各地方言の形式を把握する際に、重要になるのは、どのような調査票で、どのように調査を行うかという b) の課題である。本研究における調査にあたっては、山口県出身の筆者の内省も含め、できるだけ詳細な場面設定を心掛けた調査票を作成した。しかし、ヨル形とトル形で明確に回答形式を分けるまでは至らなかった。その点で、本研究で示したような意味の違いを誰が答えても明らかなように、さらなる調査票の改善、精査が必要である。

a) b) の課題より、各地方言のバリエーションや、その意味分けが明らかになると、次に必要になるのは、課題 c) のように実際に記述的に調査することによる各形式の意味の把握と検討、また確認である。a) b) の段階を踏むことで時間的局面を表す形式を満遍なく拾い出すことができ、そして各地域の形式全体を捉えることができる。そのうえで、この c) の段階が最も実証的なものとして必要である。本研究では、未だ各地域の形式の把握と意味検討にとどまっており、この c) の段階は今後の課題として大きく残っている。

本研究は、日本語のアスペクト研究の問題点を指摘し、さらに筆者の考える研究の方向性、また体系や理論的枠組みといったものの捉え方の改善を進めてきた結果である。本研究を通して、従来の研究の問題点や不整合な点は明らかにできた。しかし、未だ本研究は日本語のアスペクト研究に大きく踏み込んで異を唱えるだけのものではない。しっかりと現状を把握して各地方言におけるアスペクト形式のバリエーションを捉え、その意味を記述調査などにより精密化したときに、日本語のアスペクト研究の在り方をしっかりと問うものになるはずである。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本語方言のアスペクトについて、標準語をも視野に入れながら、理論的、かつ、実証的に考察したものである。全体は3部8章から構成される。

まず、第Ⅰ部「序論」では、本研究の目的を提示し、取り組むべき課題を設定する。第1章「アスペクト研究の在り方を問う」では、現在のアスペクト研究における問題点を挙げ、どのようにその問題点を改善・克服していくべきかについて論ずる。また、第2章「方言アスペクトの研究をめぐって」では、特に工藤真由美氏の研究について批判的に検討し、今後の研究の向かうべき方向性を示す。

次に、第Ⅱ部「本論」では、第Ⅰ部を受けて具体的な問題について論じる。第3章「標準語テイル形の意味・再検討」では、テイル形のもつ動作継続・結果継続という意味の二面性の問題などを考察するため、標準語のテイル形の意味を再検討する。また、第4章「調査法と理論的枠組みの再検討」では、西日本諸方言のアスペクト研究において、個々の形式の意味からアスペクトの規定が行われていないことを指摘するとともに、従来の調査の調査文を比較することで、統一的で洗練された調査票が必要であることを述べる。続く第5章「各地方言のバリエーションとその意味」では、各地方言のアスペクト形式のバリエーションを把握し、地理的な分布状況を明らかにしながら、それぞれの形式が担う意味について検討する。さらに、第6章「ヨル形の意味検討」では、西日本諸方言にみられるヨル形に焦点を当て、待遇表現やムード形式のような意味の派生について考察する。

最後に、第Ⅲ部「結論」においては、第Ⅱ部の考察をもとに、アスペクトの捉え方について一定の結論を導く。第7章「アスペクトをどう捉えるか」では、アスペクトという文法カテゴリを認めつつも、そこに含まれる形式たちが、時間的局面を切り出せるという共通点を持つ集合体として認識すべきであることを述べ、各地方言のアスペクト形式の意味特徴についてまとめる。第8章「日本語アスペクト研究の諸問題」では、各章における論述を振り返りながら、あらためて本研究の意義を述べ、また、本研究で解決まで至らなかった点や今後の課題などを述べる。

従来、日本語方言のアスペクト研究は、進行と結果といった対立軸で構成される整った枠組みで研究されるのが普通であった。本研究は、そうした学界の定説に疑問を投げかけ、個々のアスペクト形式について慎重な意味分析を行う。そして、アスペクトという文法範疇を、時間的局面に何らかの関連をもつ形式の緩やかな集合体として捉えるべきであるという新たなアスペクト観を提示する。この成果は、方言のみでなく標準語も含めた日本語アスペクト研究に大きく寄与するものであり、高く評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。